

---

# シニガミレクイエム

コニ・タン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シニガミレクイエム

### 【Nコード】

N3988E

### 【作者名】

コニ・タン

### 【あらすじ】

【「幽霊と片想いと」の裏面のような話です】ある所に、虚ろな目をした幽霊がいました。これはただ、彼女が死神だけに語る物語

## （前書き）

「幽霊と片想いと」はコメディで突っ走りましたが、こちらは全編シリアスです。補完ストーリーといえるかなんと言っかなので、あんまり楽しくないかもしれません。

少年が一人、歩いている。

電気街のテレビから駄々流れしてくるメロディーを覚えただけの下手くそな口笛を吹きながら、ボロボロに擦り切れたジャンパーに両手を突っ込みながら。

「ままならねえよなあ」

誰に聞かせるつもりも無く、少年はメロディーに雑音を混じらせる。そして、聞く人間も居ない。

ここは地下鉄、いつもは数多の人が行き交うそこに、しかし今はほとんど人が居ない。

それはそうだろう。昨日、ここで事故が起きて、今は運行が停止しているのだから。

「あーあ、ホント、可哀想だよなあ」

再び少年は呟く。下手くそな口笛を中断し、線路へと近づいていた。

そこにあるのは血のシミ。べったりと、しかしサラサラにも見える鮮血。

それを見て、少年は溜め息を一つ。

「どーしてこうなあ……人間って、面倒くせえ」

彼は、世間的に死神と呼ばれるものだった。

地獄という社会の公務員、業務内容は人間を強制的に成仏させる事。

どんな強引な手をとつても、どんな残酷な方法であろうと、満足させるかこの世に残る無価値を気づかせるか、その二択。

「本当、ままならねえよなあ」

少年　死神は血のシミを見つめて、もう一度呟いた。

そこには女性が居る、見た目は15、6の、この場では死神にか見えない女性。

「そうね、ままならないわね」

つまり、彼女は既に死んでいる。死神は彼女を“回収”しに来たのだ。

少年は軽く驚く、死を実感している人間は、普通こつも穏やかではいられないものなのだが。

「アンタさあ、気づいてるよな？　自分が死んでるって事」

「ええ、もちろん」

少年の冷めた言葉を、彼女はあっさりと肯定。その表情には恐れや心細さといったものが無く、ただひたすらに抜け殻のようだった。

「私が見えるという事は、貴方は霊媒師？　宗教家？　それともご同類かしら？」

「いや　死神だよ」

「そう」

さして興味は無かったのか、気の無い返事。

「悪いとは思うけど、コッチもお役所仕事でな。……未練があるなら、早く言ってみろ」

「そうね。じゃあ話を聞いてもらえるかしら」

死神は無言で頷き、彼女は虚ろな目のままで話し始めた。

\*\*\*

仲の良い友達だったと思う。

私と彼女は同じ学校で、同じクラスで、同じ塾で、同じ電車通学していた。

可愛い子だった。いじつても染めてもいない黒髪はよく手入れされていて艶があつたし、性格に比例してよく動く目はとても愛らしかった。

『恋をしたの!』

そんな彼女が、突然電話をかけてきて、そんな事を言った。

私は驚いた、だって彼女は恋愛なんかに興味は無さそうだったから。

「へえ、誰？」

『う、え、えーっと……言っても、多分、分からない……かな』

むずがるように恥らう彼女の声に微笑ましさを感じながら、私は次を促した。

どうやら、相手はいつも電車に乗り合わす青年らしい、多分同い年で近くの高校だろうと言っていた。

私たちが通っていたのは女子校で、男の人との接触はあまり多いわけではない。だから私は応援した。彼女を純粋に応援した。

純粋に応援していた。

次の日、私は彼を見た。

それほど特徴も無い男だった。強いて言うなら面倒くさそうに細められた目が印象的というならば印象的。制服だから分からないが、あの様子では服のセンスもいい結果は望めない。

「ねえ、あの人、どこがいいの？」

純粋な興味からの質問だったが、憧れの人をけなされたと思ったのか、彼女は頬を膨らませて答えた。

「優しいの！」

「……それはいい所が無い人を無理矢理褒めようとするかのような」

「ちーがーうーの！ 本当に優しいの！」

彼女は本当に真剣で、私は逆に呆れてしまう。

「何、もしかして捨て猫を拾っている所でも見かけたの？ それは中々少女マンガね」

「……彼はね、捨て猫なんか助けないよ」

急に、真顔になる。

「彼は“残酷”をしないの。優しい振りした野次馬とか、優しいだけの力及ばずとか、そんな事になるくらいだったら絶対に手は貸さない。でも、助けてって言われれば絶対に助けるんだよ」

「それ、流されやすいだけじゃないの？」

「違うのっ！」

彼女の言葉を聞いてから、彼の行動をよく見るようになった。

不良が優先席を陣取っていると、文句を言うでもなく自分の席を空ける、老人が座れるように。

切符の買い方が分からない子供が居たらしばらく見守り、そして駅員を呼ぶ。

彼は目立たない優しさの達人だ。絶対に目立つ事はせず、しかし影で密かに人を助けている。

どうしてそんな助け方をするのか気になって、思い切って一度話しかけたことがあった。

その質問に対する彼の返答は

「助けてくれるって期待されると、助けられなかった時が嫌だから」

じゃあ、どうして助けるの？

「だって、困ってる人を見逃すのは、気持ち悪いだろ」



彼は馬鹿正直だった、どこまでも自分に正直だった。  
良い人と言いつけるほどの良い人ではないけれど、好感は持てる。  
彼はその時の事を覚えてはいないだろう、すこしすれ違った時に  
聞いてみただけだから、変だと思いつつも記憶から薄れているだろ  
う。

次の日から、さらに注意して彼を見るようになった。

次の日も、次の日も、次の日も、その次の日も。

いつの間にか、彼を目で追うのは当たり前になっていた。

いつの間にか、私は彼が好きだったようだ。

恋愛感情なんて良く分からないから、ただの純粋な興味だったの  
かもしれない。

もしくは、一時の気の迷いだったのかもしれない。

それでも、私は彼女と良い友達でいたかった。良い友達のまま終  
わりたかった。

完璧に。絶対に。究極に。私が彼女の邪魔をすることは、何より  
も私自身が許せなかった。

ある日、私は学校を休んだ。

\*\*\*

「そして、そのまま自殺か」

「そう」

死神の声に、彼女は頷く。

「じゃあ、別に未練は無いんだな？」

「ええ、ただ 愚痴を、聞いてもらいたかっただけなのかもしれないわ」

そうか、と死神は頷いて、背後へと手を伸ばした。

そして、何も無いはずの場所を掴めば現れたのは鎌。もちろん草刈り鎌なんかじゃなく、絵で死神がよく持っているような大鎌だ。

「じゃ、逝こう……この鎌、死人へのサービス。普通に地獄に逝くか、鎌で逝くか、どうする？」

地獄に送るのに鎌は要らない、この鎌はただのサービス。

死にたくないとか喚く連中を黙らせる威嚇にも使うが、大抵は懺悔した人間に望み通りの罰を与えるもの。

この鎌は痛みを与える為だけのものだ、痛覚のないはずの幽霊に痛みを与えられる存在。

「いいえ、普通に頼むわ」

「そっか」

鎌をしまう、そしてポンと彼女の肩を叩く。

それだけで、彼女の体は薄れていった。段々と、名残惜しむように。

「ねえ 死神さん」

「なんだ？ もう頼みは聞けないぞ」

「そうじゃなくて、質問。彼と彼女は、上手くいくと思う?」

その質問に、死神は答えない。ただ口をつぐんで、下を向くだけだ。

「意地悪」

それが、彼女の最後の言葉。

それが最後に言い残した言葉だといわんばかりに、急速に体は薄れて消えた。

「ままならねえよなあ」

彼は知っている、ボロボロに擦り切れたジャンパーを羽織るこの死神は知っている。

彼女が守りたかった二人の幻想は、既に失われてしまっている事を。

奇しくも彼女が死んだ日と同日、二人は同じ駅で階段から墜ちた。女のほうは頭部が強かに打ち付けて即死、男の方も死の境をさまよっている状態だ。

彼女が守りたかった夢は、既に完膚なきまでに壊れていた。

「本当、ままならねえよなあ」

そして死神は口笛を吹く。電気街でうる覚えたヒット曲、楽しげで軽快なリズムを刻む流行歌。

その下手くそで楽しげな口笛は、今だけ、故人を偲ぶ鎮魂歌にも聞こえた。  
レクイエム



## （後書き）

前作の幽霊は、片想いだっただけというのが恥ずかしかったから一目惚れと言った、と言う設定だったりします。

一応、このまま連作にしたいんですけどね、中々時間が取れなくて短編を書けません。

これはまあ、気分転換に書いたようなもので（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3988e/>

---

シニガミレクイエム

2010年10月13日04時40分発行